

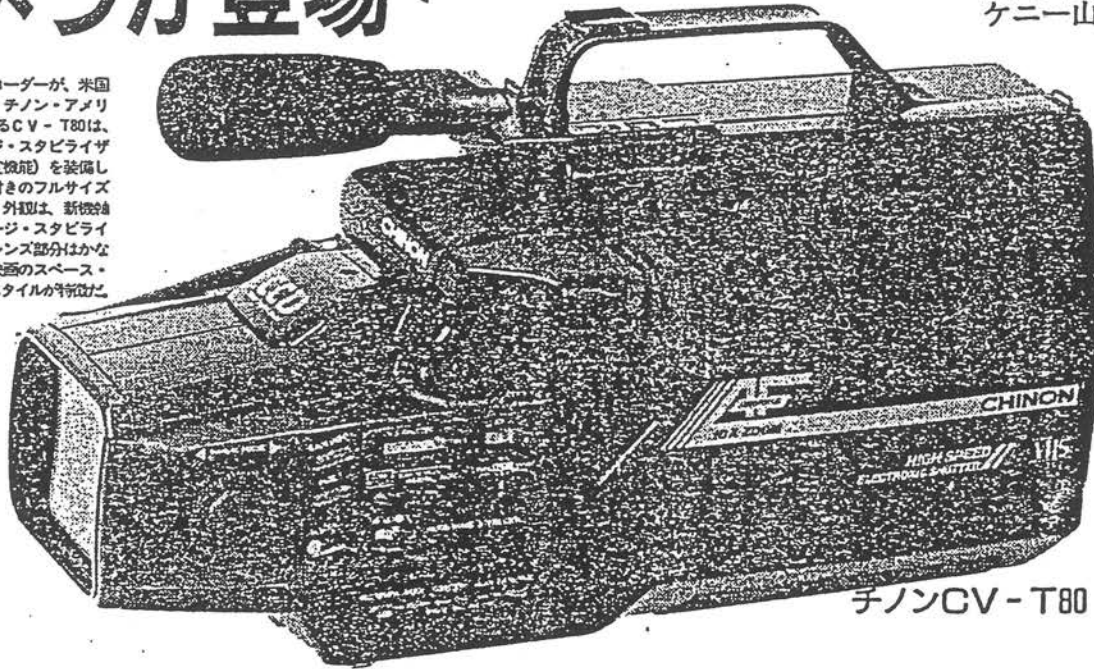
U.S.A. ビデオカルチャー 最新情報

ついにブレ防止機能付き カメラが登場



月刊ビデオキャパ
ニューヨーク特派員
ケニー山本

夢のようなカムコーダーが、米国市場に登場した。チノン・アメリカが今秋に発売するCV-T80は、オート・イメージ・スタビライザー（自動画像安定機能）を装備した、10倍ズーム付きのフルサイズVHSカメラだ。外観は、新機種のオート・イメージ・スタビライザーの内蔵で、レンズ部分はかなりの迫力。SF映画のスペース・シップのようなスタイルが特徴だ。リストプライスは2499.95ドル（米国）ナソニック社からも同じ内容のNV-460が発売されたが、日本国内での発売は未定。

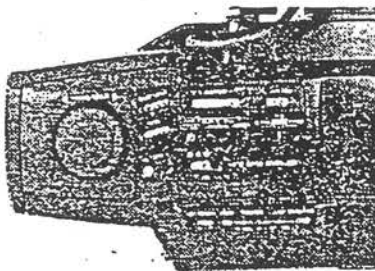


チノンCV-T80

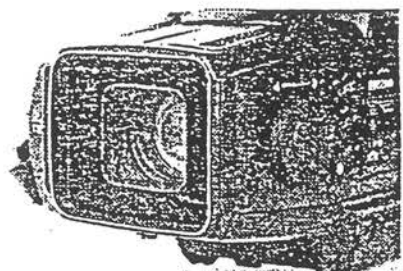
オートフォーカスの次は自動カメラブレ防止機能か。
姿をみせたオート・イメージ・スタビライザー（自動画像安定機能）付きカメラ、
チノンCV-T80の第1報！



大きなレンズキャップは、カメラ底部に専用の収納スペースがあり、落とさないようにロックできる



カメラ機能部には逆光補正、フェード、電子シャッター、マクロ切換え、AFゾーン選択、マニュアルフォーカス切換え、ホワイトバランス切換えなどのスイッチが並んでいる。A1Sは2モード、別のボタンでロックも可能。A1S内蔵のため、マニュアルフォーカス・ズーム、マクロ切換えがすべて電動化された。大型の電子ダイヤル式のフォーカスノブに注目



特設あるレンズの前面部。オート・イメージ・スタビライザー付きの8-80mmズームレンズは、大型のマルチ・コーティング・ガラスで保護されている

今回、米国で発表されたチノンのEZムービー/プロ・CV-T80は、その「カメラ・ブレ」対策を実用化したビデオカメラの第1号というわけだ（米国パナソニック社からも同時にP.V.1のモデル名で発表されたが、今回はチノンのモデルCV-T80を手にする機会を得たので、それをもとにレポートする）

このCV-T80は、外観上は松下の国内モデルNV-MS100のスタイルを

今回は、つい先ごろアメリカで発表された、チノンのオート・イメージ・スタビライザー（自動画像安定機能）付きビデオカメラについてレポートしよう。

8-80ミリの
10倍ズームに装備

チノンCV-T80のスペック

規格/標準VHS方式 (HQ回路内蔵)
録画再生時間/最大160分間 (T-160テープ使用)、SPモード専用設計
撮像素子/1/2インチ36万画素CCD固定撮像素子
ファインダー/2/3インチ白黒電子ビューファインダー
レンズ/8~80mm・F1.6、10倍電動ズーム、TTLオートフォーカス、マクロ機能、オート・イメージ・スタビライザー内蔵
色温度調整/TTLオート、屋外・タングステン・プリセット可能
最低被写体照度/15Lux (F1.6)
消費電力/DC12V・18W
その他の機能/可変速電子シャッター (1/1000、1/500、1/250)、3ヘッドシリンダー (2ヘッド録画再生・1フライング・イレース・ヘッド)、オート・イメージ・スタビライザー・オフ/ロック機能
大きさ/143mm (幅) × 229mm (高さ) × 412mm (長さ)
重さ/3.4kg

意外に軽く、 本体重量は3.4kg

基本しつつ、デジタル機能、S・VHS対応を取り除き、オート・イメージ・スタビライザー (自動画像安定機能。以下、AISと略す) と8~80ミリの10倍ズームレンズを組み込んだもので、カメラとしての基本的機能もマニア向けだ。

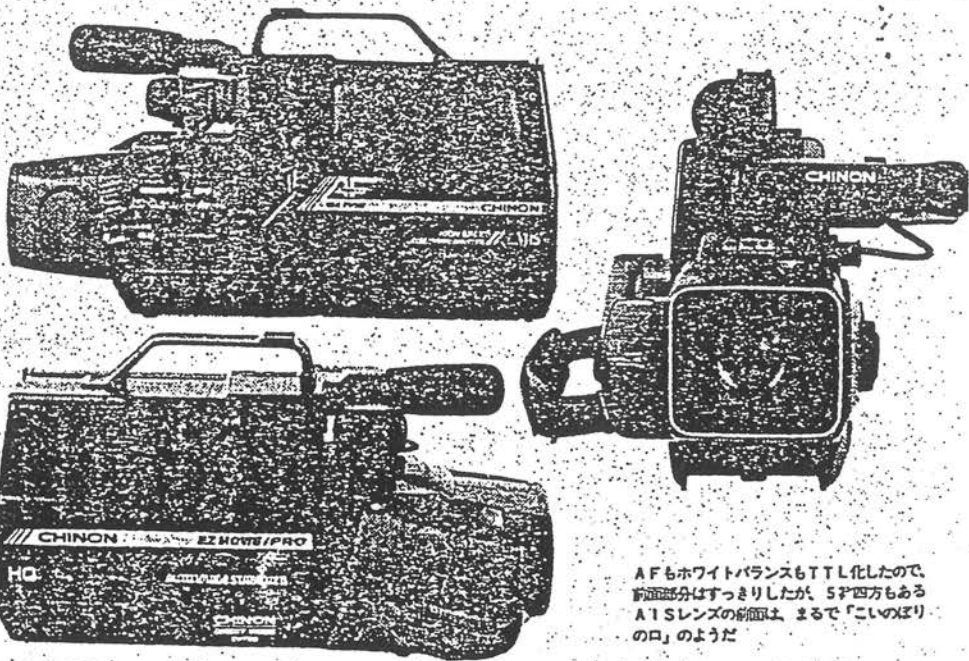
まずは早速、この話題の新機軸「AIS」について説明しよう。このAISは、カメラ内でレンズと撮像素子のアッセンブリを宙吊りにし、それに縦揺れ (ヨーイング) と横揺れ (ピッチング) を感じる2つのセンサーを設け、センサーからの信号をもとに、このアッセンブリを「フレ」とは逆の方向にモーターで駆動して、安定した画面を写すというのだ。

現実にはこのCV-T80を見るまでは、レンズと撮像素子を宙吊りにして、それにセンサーや駆動装置を付け、カメラの中に収めるとなると、かなりの体積・重量になるのだからと想像していた。そして実際に手にしてみると、レンズ部分がボックス化されたために見掛けの重量感はあるものの、本体重量は約3.4kgとNV-M80より軽くなっている。フルサイズVHSであるこ

を思えば、AISの第一号としてよくまとまっているといえそうだ。

AISには2モードあつて、AI-1はパニングング用で縦揺れのみを補正し、AI-2は車上撮影・歩行撮影用で縦揺れ・横揺れの双方を補正する。またAISをオフにすれば、普通のビデオカメラと同じように位置に止まる。AISのスイッチは、NV-M80のデジタルエフェクト用のスイッチがあつたビューファインダーの側面にあり、いちどスライドするとAI-1、再度スライドするとAI-2に、さらにもういちどスライドするとAI-オフとなる。スイッチの際にはLEDがあり、AI-1で緑色にAI-2で赤色に点灯する。またビューファインダー内にAIS使用中を示す「AI」のサインがオーバーレイする。

資料によると、このAISは通常の手持ち撮影で発生する「フレ」を75%補正吸収できるとしており、短時間ながら試用した感じでも、75%としてはつきり数字にはできないものの、ファインダーを見ているだけでかなり効果を得ていることがわかる。ただしAI-1とAI-2の使い方をまちがえると (例えば、単なるパニングングAI-1を使用すると、パニング自体が補正されるようなことになってギクシャクしたり、パニングの終点で揺り戻されたりするの



AFもホワイトバランスもTTL化したので、前面部分はすっきりしたが、5インチ四方もあるAI-1Sレンズの前面は、まるで「こいつの口」のようだ

で、チノンCV-T80を使用する前にAI-1とAI-2の使い分けを良く理解する必要がある。また、AISを使うと、撮影者はファインダーでは「フレ」を補正された状態を右眼で見ながら、左眼では人体が本来もっている「揺れ」を脳裏で補正しながら見ていることになるので、うまくマッピングができずに、ファイ

右側面には、AIS付を示すロゴ以外に特別なアイデンティティはない。従って僕等は、このカメラがAI-1とAI-2のどちらが付けられているかを、右側面には、AIS付を示すロゴ以外に特別なアイデンティティはない。従って僕等は、このカメラがAI-1とAI-2のどちらが付けられているかを、

ンダー側の眼だけが船酔いになったような気分になることがあつた。しかし、この現象にもしばらくすると慣れてきた。

望遠・マクロ撮影で 効果大

それにもまして、最大望遠時やマク

口撮影時でもAISの効果で「フレ」のない、安定した画面が得られたことは、感慨だつた。これなら手持ち撮影でもかなり安心して撮影ができそうだ。その他の機能は、前述のとおりマニア向けになっていて、デジタル機構こそ付いていないが、CCDは1/2インチ、33万画素、ヘッドは録画2ヘッドで、フライング・イレース・ヘッドも搭載、録画ともにSPモードのみ、VHS-S/VASSも内蔵し、ホワイトバランスはTTLオート (屋外・室内のマニュアルも可)、逆光補正・フールドも装備、電子シャッターは1/1000、1/500、1/250秒の3選、オートフォーカスはピエゾ式TTLで2ゾーンAFエリアの選択が可能、またマクロも最短25cmまでAFが可能。

8~80mm・F1.6のレンズはAIS機能のため、前述のとおりハウジングに包まれている。

ユニークなのは、マニュアルフォーカスだ。ハウジングの中のレンズは今までのように直接手で回せないのが、電子ダイヤル式の大ブになった。この大型ダイヤルがけっこう使いやすく、往年のシネカメラを思い出した。また、ズームも同様に電動のみにした。今回国内に先立ち、米国で発表された。読者の中には、「なぜこんな時期に、アメリカで？」と思われる方もいるだろう。理由は以前にこのコラムでも伝えたように、米国市場の家電製品年間販売の60%は、クリスマス商戦の10~12月に集中する。つまり、日本とは違い9月末までに店頭に並んでなければ、デパートの広告にも載せてもらえず、お客も指名してくれないからだ。

今年の米国市場では、70万台以上の一体型ビデオカメラ (ちなみに日本では10万台以上) が売れると予想されている。このAIS付きチノンCV-T80、はたして人気商品になるか、このクリスマス商戦に期待したい。